

日本でキリスト教の話をしますと、日本人とイエス・キリストとはいったいどんな関わりがあるのか、と言って拒否されることがあります。イスラエルの神のことやユダヤ人であるイエスをイスラエルの人々が信じるならまだしも、なんで日本人の私たちが聖書の神やキリスト教を信じなければならないのか。そんなふうに考えている方々も、少なくないのではないでしょうか。確かに、聖書に出てくる神様は、もともとはイスラエル民族の神、イスラエルの民族神でした。あの地方には民族ごとにそれぞれの民族神がいて、民族同士の戦争になるとそれぞれの神が戦うということを意味していました。戦争に負けるということは、民族の敗北と同時にそれぞれの神が負けることを意味していたのです。

イスラエルの民族神であった聖書の神が、なぜ、世界中で信仰されるようになったのか。これは勉強会でもお話ししましたが、聖書に記されている神には、他の民俗神にはない際立った2つの特徴がありました。一つは、聖書の神は天地創造の神であったということ。二つ目は、天地創造の神である聖書の神は、人間から付けられた名前を持たないということ。この二つの特徴を持っています。天と地を造られた神様は、他の民族神である偶像の神々のように、人間の手によって造られた神々とはまったく違っていたのです。

この世界には、人間の思い通りにならないことがたくさんあります。農民は、作物の豊作を願い、天候が安定するように豊穡の神に願います。漁師は、海の安全と大漁を願って、海の神に祈ります。けれども、聖書が語る神は、人間の欲求を満たすためにいる神ではなく、人間が望むか望まないかには関係なく、天と地を造られた神だと証言するのです。詩編24編の冒頭には、こう記されています。【地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの。主は、大海の上に地の基を置き、潮の流れの上に世界を築かれた。】

天地を造られた神様は、人間の手で造られた神殿にお住まいにはなりません。イスラエルの偉大なダビデ王は、主の神殿を建てることが出来ませんでした。イスラエルの神殿建築は、ダビデの息子のソロモン王に委ねられますが、そのソロモン王が神殿を建てた際、神様に向かって祈った祈りが列王記上に記されています。その祈りの中に、こんな言葉が出てきます。旧約聖書542ページ、列王記上8章27節以下です。【神は果たして地上にお住まいになるのでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。わが神、主よ、ただ僕の祈りと願いを顧みて、今日僕が御前にささげる叫びと祈りを聞き届けてください。そして、夜も昼もこの神殿に、この所に御目を注いでください。ここはあなたが、『わたしの名をとどめる』と仰せになった所です。】 このようにソロモンは、神殿を神の住まいとしてではなく、神がそこに目を注ぎ、自分たちの叫びや祈りを聞き届けてくださる場所として建てるのです。

聖書のいちばん初めに創世記が出てきます。神様が天と地を造られた。そしてそこに命あるものを造られた。神様の順序に従って造られた。神はこの世界に神の秩序を与えてくださいました。命の秩序。何も存在しなかったこの大地と海に、命を与えてくださった。命を生み、命を育み、命を守る。これが、神様がくださった命の秩序、神の秩序です。この神様がくださった世界を任された人間は、けれどもこの世界が神によって造られたこと

を忘れ、自分たちの私利私欲によってこの世界を所有し、搾取し、破壊しました。命を生み、命を育み、命を守る神の秩序に対して、人間は命を奪い、命を傷つけ、命を危険にさらしてきたのです。そして、その人間が自分たちに都合の良い神々を作り出していった。偶像の神々を作り出すということは、人間の思い通りになる神を作り上げること。その神を利用して人間の勝手な思いを神の意志として人々に告知らせる道具として、偶像は用いられました。その偶像に対して、聖書にはとても厳しい言葉が記されています。

預言者エレミヤは、エレミヤ書 10 章 1 節以下に次のように記しています。旧約聖書の 1194 ページです。【イスラエルの家よ、主があなたたちに語られた言葉を聞け。主はこう言われる。異国の民の道に倣うな。天に現れるしるしを恐れるな。それらを恐れるのは異国の民のすることだ。もろもろの民が恐れるものは空しいもの。森から切り出された木片、木工がのみを振るって造ったもの。金銀で飾られ、留め金をもって固定され、身動きもしない。きゅうり畑のかかしのようで、口も利けず、歩けないので、運ばれて行く。そのようなものを恐れるな。彼らは災いをくだすことも、幸いをもたらすこともできない。】また預言者イザヤは、イザヤ書 44 章 9 節以下でこう語っています。旧約聖書の 1133 ページです。【偶像を形づくる者は皆、無力で、彼らが慕うものも役に立たない。彼ら自身が証人だ。見ることも、知ることもなく、恥を受ける。無力な神を造り、役に立たない偶像を鑄る者はすべて、その仲間と共に恥を受ける。職人も皆、人間にすぎず、皆集まって立ち、恐れ、恥を受ける。鉄工は金槌と炭火を使って仕事をする。槌でたたいて形を造り、強い腕を振るって働くが、飢えれば力も減り、水を飲まなければ疲れる。木工は寸法を計り、石筆で図を描き、のみで削り、コンパスで図を描き、人の形に似せ、人間の美しさに似せて作り、神殿に置く。彼は林の中で力を尽くし、樅を切り、柏や檜の木を選び、また、樅の木を植え、雨が育てるのを待つ。木は薪になるもの。人はその一部を取って体を温め、一部を燃やしてパンを焼き、その木で神を造ってそれにひれ伏し、木像に仕立ててそれを拝むのか。また、木材の半分を燃やして火にし、肉を食べようとしてその半分の上であぶり、食べ飽きて身が温まると「ああ、温かい、炎が見える」などと言う。残りの木で神を、自分のための偶像を造り、ひれ伏して拝み、祈って言う。「お救いください、あなたはわたしの神」と。】このように偶像とは、人の満足を満たすために人の手によって作られた神ならぬ神であり、人をまことの神から遠ざけるもののなのです。

私たちが住むこの日本の国は、アテネの町と同様にたくさんの偶像の神々が存在しています。八百万の神々がいたところに存在しているのです。そこでパウロが偶像の町であるアテネで伝道したその方法から、日本での伝道に対するヒントを見てみたいと思います。

パウロはアテネの人たちに対して、イスラエルの歴史から紐解くことをしませんでした。ユダヤ人ではないアテネの人たちに、神の選びや、神の約束としての救い主の到来は意味をなさなかったのです。そこでパウロは、アテネの町にある偶像の神々に対して、まことの神の存在を告知させるのです。アテネの人たちに向かってパウロは語ります。23 節、【道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見てみると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう。世界とその中の万物を造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住まいになりません。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。

すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです。】パウロは、この世界を造られた天地創造の神を、まことの神としてアテネの人たちに現わします。ではその神はどうやったら知ることができるのか。パウロは続けて、この世に存在する森羅万象を見れば一目瞭然であると語るのです。26節、【神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住まわせ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。これは人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見出すことができるようにということです。】

大自然の営み、春夏秋冬めぐりゆく季節。春に命の息吹が与えられ、夏にその命を謳歌し、秋には枯れて、冬になると土に帰っていく。しかしそれはまた、次の新たなる命の準備として用いられる。失われた命は消えてなくなるのではなく、次の命を生み出す大きな使命を担っていく。こうして命が引き継がれ、命のうねりとなって表れていく。私たちの命が担うのはほんの一時代かもしれないけれども、この命は前の人たちから受け継がれ、次の時代へと引き継がれていく。これが命を生み、命を育み、命を守る神の秩序、命の秩序であり、私たちはこの営みの中に神の永遠の思いを見出すことができるのです。

この世界を形作っている命の循環。それは、命が次の命へと移り変わっていく輪廻転生ではなく、命が亡くなることによって次の命を生み出す用意をしていく。命の引き渡し。

【一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。】ヨハネによる福音書12章24節に出てくる、イエス様の有名な言葉です。この自然の営みの中に、私たちは神の業を見るのです。

そしてパウロがアテネの人たちに告げ知らせたのは、もう一つ、とても大切なことでした。このように命の循環の中に、命の神様の働きや御意思を見ることができ、そこに神を見出すことができるのだと語ったパウロは、しかし、自然の法則を打ち破る神の働きをさらに人々に告げ知らせたのです。パウロは30節以下でこう語ります。【さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです。】

一つの命が尽きて次の命を生み出す準備として命の循環が行われていく自然の法則の中に神を見出すことができると語ったパウロは、しかしその自然法則を打ち破り、死者の中からイエス・キリストを復活させて、すべての人に確証を与えてくださったと語るのです。

私たちが生きているこの日本の社会は、アテネの町のように偶像の神々がたくさん存在する国です。しかし、アテネという異邦人の地においてパウロが語ったように、私たちも天地創造のまことの神を現わしながら、同時に神が造り給うたその自然法則さえも打ち破り、死者の中からイエス・キリストを復活させたこの神を、告げ知らせていこうではありませんか。そこには大きな希望と可能性があります。なぜなら、ここにいる私たち自身が、もともとイスラエルの民ではない、神を知らない異邦人だったのですから。この私たちでさえ救いをいただいたのですから、この国のすべての人たちが神の救いにあずかることができるのです。この希望をいただきながら、私たちも天地の創り主である神、死者の中からイエス・キリストをよみがえらせてくださった神を宣べ伝えていこうではありませんか。

お祈りしましょう。